

〈書評〉

細田晴子『カザルスと国際政治 カタルーニャの大地から世界へ』吉田書店、2013年

尾 尻 希 和

恥ずかしながら、評者はスペインやカタルーニャ事情に疎い。本書を手にとって「カザルスって誰だろう」と思ったのだが、チェロ奏者と知り、すでに彼が演奏した無伴奏チェロ組曲（バッハ）の音楽CDを自分が所持していたことに気づいた。したがって、パウ・カザルスの生涯や彼の生きた時代のことを知らなくても、彼のチェロの音色を聞いたことのある人は非常に多いことと推察される。

しかしカザルスの名声は、単なる「偉大なチェリスト」にとどまらない。彼が生きた時代、スペインは王政から共和政へと移り、さらには内戦を経てフランコ政権が樹立されるという政治的、社会的激動を体験した。スペイン内戦の悲惨さ、フランコ政権による甚大な人権侵害についてはここで改めて紹介するまでもない。カザルスはそのフランコ政権を終わらせるため、フランコ政権を承認する国では演奏しないというボイコットを実践し、後に類い稀な人道主義者、平和主義者として名をはせたのである。

カザルスはまた、カタルーニャ語を使ってメッセージを送ったり、カタルーニャ民謡をもとに作曲し演奏をした「カタルーニャ主義者」としても知られ、いわゆる「カスティーリャ主義」に反対する人々からも広く支持されている。フランコ政権はカタルーニャ語の使用を禁止するなど、地域

文化を弾圧した。著名なチェリストとして世界的に有名なカザルスが臆することなくカタルーニャ文化への深い愛情を語る姿は、カタルーニャ人にとって誇りであり、カタルーニャのシンボルであった。

以上は、本書評を書くにあたり評者が手にした先行研究にもとづく「カザルス伝」であるが、ここで紹介する『カザルスと国際政治 カタルーニャの大地から世界へ』で著者細田晴子は、そのカザルスがフランコ独裁に異を唱える文化人として、どのように国際的に知られるようになっていったかを歴史学的手法を用いて分析している。そして「文化国際主義者」としてのカザルスの真実に迫るという本書の目的を見事に達成している。以下ではまず本書の構成を紹介し、本書の議論を説明してから、評者なりの見解を述べたい。

本書の構成は「はじめに」、「第I章：カタルーニャから世界へ 1876年～」、「第II章：フランス亡命下のカザルス 1939年～」、「第III章：プエルトリコのカザルス 1957年～」、「第IV章 世界からカタルーニャへ 1964年～」「おわりに」となっている。

「はじめに」で著者は、本書の目的として、「第一に、文化国際主義者としてのカザルスを分析する」こと、「第二に、カザルスの地域ナショナリズム、アイデンティティを明らかにする」こと、「第三に、音楽と政治の相関関係を明らかにする」ことを挙げている。そして分析にあたっては、先行研究であり触れられていない「カザルスのカタルーニャ性」や「亡命スペイン人とカザルスの関係」、そして「プエルトリコにおけるカザルス」を分析対象に入れることを強調している。また資料としては、書簡などの一次資料を新たに用いること、また、スペイン語や英語に加えてカタルーニャ語、フランス語、ドイツ語の資料やカタルーニャ研究者へのインタビューの成果を取り入れたとしている。

本書の目的に掲げられているとおり、「文化国際主義者」というのが本書の重要なキーワードの一つであるが、著者によるとこれは入江昭が定義したものであるという。「『文化交流を通じて、国や民族とは異なる共同体

を形成しよう』とする個人や集団の努力が、『世界という共同体を大きく変質させ、国際問題に対する我々の理解を計りしれないほど豊かにしてくれた』として、彼らの努力の源泉となった知的世界やその功績を総称して『文化国際主義』と名づけた」のだとしている。さらに、著者は社会における知識人の役割の重要性を、サイドの言葉を引用して訴えている。政治の「アマチュア」である知識人は「現状の攪乱者」であるが、それは、知識人が「人間の悲惨と抑圧に関する真実を語る」責務を負っているからであるとサイドは述べているという。そして、以下に述べるように、著者の「カザルスはまさに『文化国際主義者』であった」という主張は非常に説得力があるのである。

本書によると、スペイン支配下のカタルーニャに1876年に生まれたカザルスは当地で音楽教育を受けた後、マドリードで宮廷の庇護を受けながら音楽以外の教養も身につけ、パリ留学を経てチェリストとして第一級の地位を確立した。カタルーニャに戻ってからは自身で楽団を設立するなど、故郷における音楽家の育成にも力を入れていた。しかし1936年にスペイン内戦が勃発すると、同じカタルーニャ語圏のプラード（フランス）に亡命した。内戦に勝利したフランコ将軍が、政敵および政敵に味方した民衆を抹殺し一種の恐怖政治体制を敷いたのは周知のとおりである。ナチス・ドイツのフランス占領後もプラードに留まり続けたカザルスには、ドイツ政府からの演奏要請が何度もあったというが、彼はこれを気丈に拒否し続けた。独裁政権に決して屈服しない音楽家、という「カザルス伝説」のはじまりである。

ナチス・ドイツ敗北後、ロンドンの演奏会に招かれたカザルスは、英国政府がフランコ政権を承認するという政策を知って愕然とする。そして、そのような国では演奏をすることはできないという結論に至り、演奏日程を途中でキャンセルしてプラードに戻った。カザルスが演奏をボイコットした国は英国だけではなく、フランコ政権を承認しているすべての国であった。カザルスのような世界的に評価の高い音楽家が演奏をやらないと

いうのは、音楽家としての本懐を著しく損なう行為であるし、まして、多大な経済的利益を自ら放棄することを意味する。その後1973年に死去するまでの間、カザルスは国連やホワイトハウスなどでわずか数回だけ演奏するが、著者によると、通常は演奏を拒否するカザルスが演奏会に赴くときは、世界中のマスコミがその貴重な一瞬を取材しようと押し寄せたため、カザルスの反フランコ運動が、国際社会に向けて最大の広告効果を与えたのだという。

国連やホワイトハウスという、高度な広告効果のある場所を除けば、カザルスは重ねて演奏の要請を断った。困ったのは、カザルスの音楽を心から愛する音楽家仲間である。そこで、カザルスが居住している街に彼の音楽仲間が集まって演奏会を開いたのが「ブラード・フェスティバル」の起源となった。世界中から一流の音楽家たちがカザルスのために集結し、この音楽界は、またしても国際社会に向けた広告塔として多大な成功を収めたという。本書によれば、この音楽祭には亡命カタルーニャ人が集まる場所にもなり、カザルスがカタルーニャ人たちの象徴的な存在となるきっかけとなったのだとしている。

本書では、カタルーニャ文化の発展にカザルスが果たした役割も詳細に述べられている。故郷に帰れない人たちが、どのように故郷と一体化するかというと、それは文化行事を通じて、ということになろう。著者によると、亡命カタルーニャ人たちは、舞踊「サルダナ」や詩のコンテスト「花の宴」を通じて自分たちの結束を確認していたが、カザルスは積極的にこれに協力し、曲も提供したのだという。

さらに、本書の真骨頂と言えるのは、カザルスの名声が高まるにしたがって、その名声を自分たちのために利用しようとする様々な動きが展開されたことが明らかにされている部分であろう。まず、本書で取り上げられているのは亡命スペイン人、カタルーニャ人たちである。彼らの中には共和政府派やカタルーニャ主義者などがいたが、いずれもカザルスの名声を自分たちの運動に利用しようと必死だった。しかし、互いの運動を優先

するあまり、彼らの間の協力関係はかならずしもうまくいかなかった。本書によると、1957年から58年にかけてカザルスにノーベル平和賞を受賞させようという運動がカザルス支持者の間で高まったのだが、カタルーニャ主義者がカザルスのカタルーニャ主義の側面を強調しすぎることを共和政府派が危惧したため、うまくいかなかったのだという。

また、カザルスがフランスの次に亡命先としたプエルトリコでも、カザルスを「祭り上げる」さまざまな動きがあったことが本書では紹介されている。当時、自治を獲得したばかりのプエルトリコ政府関係者は、カザルスの名を冠した音楽祭を開くことによって、プエルトリコの名を世界に広めることを目論んだ。そしてフェスティバルの成功とともに、その目論見は成功したのである。このプエルトリコ政府の目論見が、カザルス死後の「カザルス」名称使用をめぐる、プエルトリコ政府とカザルスの遺族との間の対立をもたらすことになったのだというが、じつに象徴的なエピソードである。

また、米国政府もカザルスの名声を利用しようとしたという。本書によれば、当初は米国政府の「ソフト・パワー」戦略の一環として、米国を含む西側諸国の文化としてカザルスを紹介することで東側に対する優位を確立しようとしたという。そしてカザルスも、彼の反フランコ運動、カタルーニャ主義運動を世界に知らしめる一環としてこれを引き受けた、としている。その後、ケネディやジョンソンら米国大統領と会談し、反フランコ政策を訴える機会を得たのであるから、カザルスの戦略は功を奏したと考えられよう。

以上が、評者が本書から読み取った「真のカザルス像」である。では次に、著者が本書で掲げた三つの目的がどの程度達成されているか、評者なりに考えてみたい。

まず著者が第一の目的とした、「文化国際主義者としてのカザルス」についての著者の分析であるが、この部分が本書の最大の魅力であろう。著者は先行研究があまり目を向けてこなかった、亡命スペイン人・カタルー

ニヤ人とカザルスの関係に注目する、と「はじめに」で述べているが、その言葉どおり、カザルスと亡命スペイン人・カタルーニヤ人との間で交わされた書簡を直接読み込み、カザルスが彼らの間でどのような役割を果たしたかを詳細に分析している。カザルスは、音楽家としての、そして人間としての良心のみに従い、自らを「演奏しない」という苦しい状況に追い込み、愚直に「現状を攪乱」しようとしたことが明らかにされている。また、国連やホワイトハウスとの関係についても、膨大な一次資料に目を通してカザルスとの微妙で複雑な相互関係を明らかにしている。著者が「はじめに」で予告したとおり、米国人のカザルス伝では触れられていないベトナム戦争の是非をめぐるカザルスの意見表明の不可解さは、本書によってはじめて目の目を見たといえるのではないか。

次に、著者が本書の第二の目的として掲げた「第二に、カザルスの地域ナショナリズム、アイデンティティを明らかにする」ことについてであるが、カザルス音楽の偉大さが「カタルーニヤ性」によって説明されている部分のロジックが評者には理解できなかった。例えば、カタルーニヤ文化に内在する「農民性」を示すものとして、カタルーニヤ人が「土」に言及している証言を集めているが、それがカザルス音楽とどう関係しているのか、評者にはわからない。この点については評者の理解不足を素直に認めたい。また、著者が第三の目的とした「音楽と政治の相関関係」についてであるが、本書の結論部分の「まとめ」で著者が「世界共通語としての音楽」とカザルスの「カタルーニヤ性」との関連を述べているものの、それがどういうことなのか評者には理解できなかった。ただ、第三の目的については、あらためて著者の言葉で解説されたものを読むよりも、著者が新たに発掘した「真のカザルス像」を知ること、カザルスの「背中」から感じ取れるものがあるように思われる。

評者が本書のカザルス分析から学んだことは多い。評者は比較政治学を専門にしているため、アクターとして注目するのは政治家が多いのだが、「現状の攪乱者」である知識人の行動に注目することの重要性を知った。

カザルスは、内戦を引き起こしたフランコの体制を終わらせるために音楽家としてできるだけのことをしようとした。またカザルスが政治的野心とは無縁でいかなる政党にも属さなかったからこそカタルーニャ人や共和政府派、はては米国の反共産主義者にいたる、多くの人々から熱烈に支持されることになったのだと感じた。そして彼の作曲した「パセブラ」が平和主義者の「プロテスト・ソング」になるほど受け入れられたのは、カザルスの郷土愛のみならず、自由や民主主義に対する信念、さらにはこの世のすべての人間に対する深い尊敬や愛情にあるのではないかと思うが、それを気付かせてくれたのは本書である。

筆を置く前に、本誌の読者として多数を占めるラテンアメリカ研究者にとっての本書の意義をあらためて考えてみると、それはやはり、「型にはめた」研究姿勢を打破している、ということではないだろうか。著者はカザルスという音楽家に興味をもち、スペインの他カナダ、米国、プエルトリコにまで足を伸ばして一次資料の発掘に努めた。評者自身への戒めも込めて言うが、日本のラテンアメリカ研究の課題として、研究テーマが特定の地域や村、時代、事象に限られることが多いことが指摘されてきた。スペイン現代史を専門としながらも、著者が芸術文化の領域に飛び込み、カタルーニャ語、フランス語、ドイツ語までも駆使して本書を完成させたことに敬意を表したい。そして本書をきっかけとしてそのような研究が今後増えていくことを期待したい。